

はじまった平成の大遷宮—出雲大社

国宝本殿の千木、鯉木の銅板(130年前)を取り換え

明治二十三年、初めて出雲大社を訪れたラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は、「出雲は、わけても神々の国」と評している。高々とそびえる千木をいただく本殿の威厳あるたたずまいはもとより、境内を包む荘厳な空気、背景となる深い森のもつオーラも含め、ハーンも見えざる神々の存在をひしひしと感じたのかもしれない。神在月(旧暦十月)には全国八百万の神々がここに集うという。

『古事記』、『日本書紀』によれば、伊弉那岐命と伊弉那美命によって多くの神々が生み出されたが、そのひとりが須佐之男命である。当時の最高神であった天照大御神の命に逆らった須佐之男命は追放され、出雲国へ降り立つ。この地の楠名田比売との間に子をもうけ、その子孫として生まれたのが大国主命である。現在は結びの神様、だいきくさまとして崇められている。さてこの大国主命が天照大御神によって出雲国を差し出すよう命じられる。これが「国譲り伝説」である。この国譲りに際し大国主命は国を譲ると引換えに要求した宮殿が出雲大社の起源とされている。実際の創建年代は不明だが、六五九年に修復されたとの記録があることから、それより前であることは間違いない。その出雲大社に祭られているのが大国主命なのである。

そしていま出雲大社が約六〇年ぶりに大改修(平成の大遷宮)が行われている。現在の国宝本殿(高さ二十四間)は江戸中期の一七四四年に造宮され、その後二八八年、一九五三年と大改修されており、今回で三回目のものである。本殿をはじめ十六の建造物が改修されることになる。

檜皮葺きの本殿大屋根は六四万枚の膨大な量の檜皮二枚が1m以上の長大なものを使用、軒先の厚さは1mにも達する。この屋根に取付けられた神社建築特有の千木(屋根の両端で交差させた木)と鯉木(屋根の上に棟に直角になるように並べた板木で、形が鯉に似ていることが名前の由来)そして棟の前後に取付けられた鬼板

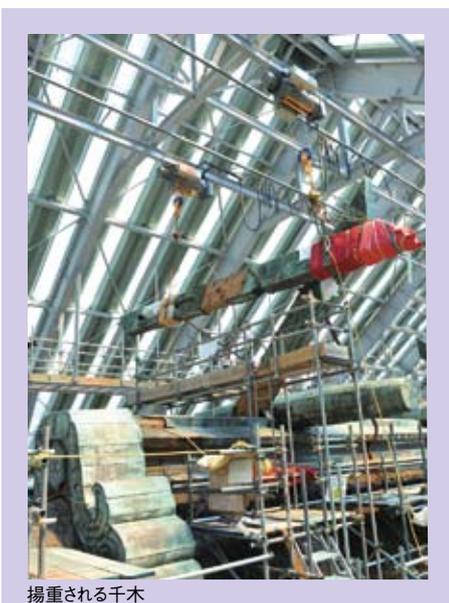
の取り外し作業がこのほど行われた。一般の神社ではこれらには生木が使用されるがこの大屋根では周囲に銅板が巻かれている。その大きさも桁外れだ。千木は長さ七・九m、幅七十六cmもあり、芯木はマツである。取り外し作業では県内の宮大工やとび職人十人が本殿を覆う素屋根に設置したクレーンなどを使用し、慎重に取り外した。木部から取り外された銅板は平板に分離、整理され、本殿内に保管されている。銅板は約三〇年前に施工されたものと思われ、施工時の姿を今にとどめている。出雲大社の根源をなす本殿を長い間湿気から守ってきた凛とした風格が漂っていた。

この工事を管理されている出雲大社・平岡邦彦補宜は言われる—銅板が施工された三〇年前は現代的な圧延技術はもろろなく、おそらく銅塊をたたいて伸ばし板状にしていたものと考えられます。このため板厚も現在のものとは比べ近い厚さがあり、これを平葺きで現在と同様の施工技術で葺いていたことに驚かされます。千木、鯉木などは今後調査の上、傷みの状況から補修(現状回復)を施し、再度取付けることとなります。ただし銅板については新しいものに替えることになりそうで、従来の銅板は別途再利用の用途が検討されて行くでしょう—。

平成の大遷宮が完了するのは平成二十五年の予定である。



出雲大社
平岡邦彦補宜



揚重される千木



取り外される千木と鯉木



出雲大社の全景

本殿大屋根に取付けられた千木、鯉木